

多職種連携に思うこと

遠藤 眞美

What is interprofessional Collaboration?

Mami Endoh

近年、障害者歯科や高齢者歯科医療が注目され、様々なところで多職種連携というコトバを聞く機会が多い。むしろブームにまで思う。各専門学会の抄録を開けば『多職種』というコトバを必ずと言って良いほど目にする。

多職種連携を語る際には『口腔ケア』の概念を無視することはできない。過去に歯科医療は、う蝕や歯科疾患を対象とした外来診療が中心であった。しかし、1994年に『口腔ケア』が定義され、介護保険などでも口腔ケアや口腔機能などのコトバが頻繁に使用されるようになり、特に、日本人の死因第3位である肺炎と口腔ケアの関係が注目されるようになってから生活における歯科医療の社会的役割が大きくなったように感じる。また、手術前後の口腔ケア効果が明らかとなり、医療の現場に口腔機能管理料が新設され、術後における生活の質を維持するために医療と歯科医療が連携するようになった。このように、口腔ケアというコトバによって、歯科医療と医療、歯科医療と福祉、歯科医療と生活がかなり近づき、健康長寿を語る

際に、歯科医療者の関わりは欠かせないものと認識されつつある。歯科医療者は口腔の専門家であって、単独では健康長寿を支えられない。そこで、注目されてきたのが『多職種連携』だと思う。

障害者歯科医療に携わっている自分にとっては決して珍しいものではなく、実際の現場ではそれなりに行われてきた。しかし、今、全ての歯科医療者に『多職種連携』が求められるようになり、どのように歯科が関わるべきか困惑している方がいらっしやるように感じるのは私だけだろうか。

最近、『多職種連携』をテーマにした歯科医療従事者対象の講習会開催が盛んに行われている。専門的な病院などの取り組みから、地域活動までさまざまな内容で開催され、注目の高さがわかる。しかし、多職種連携は注目されたばかりであり、概念が明確にされていないことによってその内容は様々といえる。以前、参加させて頂いた地域で活動している先生方を対象とした講習会では、高次医療機関で実施している嚥下内視鏡検査（VE）などの精密検査が中心の内容であった。医科で使用する医療機器を使用した精密検査であれば共通の診断媒体となり、多職種連携になるという内容であった。スクリーニング検査実施後に必要に応じて行う精密検査は重要である。しかし、その講習会では、訪問診療対象の要介護高齢者にはVEを行い診断し、食べれるかどうかを客観的に判断すべきものという内容で、多くの聴講者は自分に来るのかと不安に感じられていた。また、本来、

【著者連絡先】

〒803-8580 福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目6-1
九州歯科大学生体機能学講座老年障害者歯科学分野
遠藤眞美

TEL&FAX : 093-285-3074

E-mail : endoh.mami@nihon-u.ac.jp

受理日 : 2012年11月30日

VEの結果だけでは食生活の支援方法は決定できるわけがなく、これが連携なのかと不思議に思った。対象者に対する方針は全身状態、思い、地域性や社会との関わりによって異なってくる。ただし、対象者や周囲の思いだけで対応するのは危険である。したがって、その対象者に関わる様々な専門職種が臨床経験だけでなく科学的根拠に基づいた評価を行いながら、その方の人生観や価値観を中心とした治療やケア計画を決定するべきである。つまり、歯科医療従事者だけでなく対象者を取り巻く職種と情報を共有することによって、患者に対する適切な支援方法がわかってくる。

歯科医療従事者は、生活における重要な機能である食べる、話す、呼吸などが口腔機能の維持・向上を図るために患者の生活に寄り添ってきた。歯周疾患の治療などにおいても原因と予防方法を患者と相談しながら歯科保健指導の時間を共有しており、他の職種に比較して患者の人生を共に過ごす時間の長い医療者の一人であるといえる。一人の患者に対し口腔という領域から生活にまで全人的に関わるために他の分野について独自に勉強したり、慣習的に対応してきた面もあった。『多職種連携』というコトバのブームによって、他科の科学的根拠に耳を傾けて自己完結をしていた状況から実際に他の職種と情報や意見を共有し、自信を持って専門性を発揮できるようになったと予想できる。また、生活に密着した医療者と

いう強みから戸惑うどころか『他職種連携』において重要な役割を担うことができ、その結果、患者や国民の健康長寿に歯科医療者が寄与するところが大きくなっていくと考えている。

患者や国民は今まで各病気や機能減退がある人とその専門の職種ごとに対応されてきていた。最初の科ではある側面を我慢して、また次の科に行けば別の側面を我慢すると言った患者の臓器や機能別の対応を患者自らがバランスをとるような医療と福祉の関わりだったと思う。『多職種連携』が問題なく行われれば患者が自らバランスをとる必要はなく、健康な生活やその人らしい生活が容易に実現すると考えることができる。したがって、『多職種連携』をブームで終わらせてはならない。特に生活に密着する歯科医療はその役割が大きく今後、ますます、歯科医療への期待が高まることが予想される。過去の歯科教育において『多職種連携』は明確に定義化されては行われていなかった。したがって、これから卒業する学生は専門用語を知らないから、自分は歯科学の学びしかしてこなかったからというわけにはいかない。関わる対象者を全人的に把握し、自己実現を図れるような支援方法を計画出来るようにならなければならない。大学教育に携わる身として国民の健康のために『他職種連携』がブームで終わらないように歯科医療者の新たな役割を担える人材を育成できるように今後も努力していきたい。